Tea Room（ティールーム）

研究者とは好奇心の塊である

白井（しらい）　裕子（ゆうこ）
（大学院政策・メディア研究科准教授）

研究者とは好奇心の塊である。とくに工学系研究者は，新しいものは自分の手にとってみて，自分の手で動かしてみないと気が済まない。そして，その研究者である教員の好奇心が学生たちにも伝播していく。

湘南藤沢キャンパス（以下SFC）のメディアセンターには，様々な道具・装置が大学生活の身近な存在として用意されている。そして，それらが学生や我々研究者の目につく所に置かれているのである！これを私たちが放っておけるわけがない。

私と学生たちは，3Dプリンタ，3Dスキャナ，モーションキャプチャ，音響スタジオ，動画の撮影・編集などの講習を受けている。またこの道具や装置が次々と更新されるため，今度は何が変わるのか，何が入るのか，楽しみになってしまっている。

学生たちが見よう見まねの我流で使ってくれるのも，頼もしい限り。しかしこの一方で，教員としては，学生たちには原理原則的なこと，つまりできる限りその基礎的なことを教えたい，学ばせたい，その方がその先の応用，彼らの思考も広がるだろうと考える。そこでメディアセンターにお願いし，研究会でも講習をリクエストしている。その際には，道具・装置に触れる前に，一体どういうシステムなのか等々まで説明してくださる。

そして，ここで書かねばならないのは，メディアセンターによる「オンデマンドセミナー」である。授業にメディアセンターの専門の方をお呼びして，資料検索の方法から引用の仕方に始まり，大学の電子データベースの紹介やMendeleyの使い方まで，学生たちに教えていただいている。これも授業や研究会の専門性に合わせてくれるのである！

私は林業から木材，木造までを一気に教えており（授業名：フォレスト・サイエンス・アンド・エンジニアリングの上流と下流），もとは建築専攻ということで，特に建築の構法と材料の授業も仰せつかっている。建築士受験の必修科目であり，学生のテンションも高い。この授業にメディアセンターの方をお呼びしている。このオンデマンドセミナーで学生から歓声が上がるのが，近代建築の巨匠ル・コルビュジェの図面見放題，「日経アーキテクチュア」見放題等々の発見である。

私はこれとはまた毛色の違う「科学ライティングワークショップ」という授業も担当しており，ここでは研究，そして論文の最初の一歩を教えている。前任校では，学部生ならば4年生以上，主に修士・博士の研究指導が多かったため，この授業で少し安堵する。SFCに着任当時，学部生の授業，それも半分以上を女子学生が占める教室に入って，その様子にどれだけ驚いたかしれない。教室に女子学生が3人以上並んでいる光景は初めてだったのだ。

ところで，この「科学ライティングワークショップ」のオンデマンドセミナーは，学生にとって即実践的な内容である。今，論文を読んでいる，今，論文を書いている学生にとっては，聞きたい話ばかりである。

どうやったら自分の求める資料を探し当てることができるのか，この「小さな宝探しの秘訣」を教えてもらっている。その探検の過程で他の検索手段へと導いてくれる通称「（資料を）諦めないでリンク」まで，学生のメモリーにインプットされる。いかに学生に楽しく，しっかり教えるか，メディアセンターの担当の方の思いやりが伝わってくる。ここでまた学生たちは「図書館・情報学」という専門分野に目を見開かされるのだ。担当の方のキャラクターに圧倒され，学生にとっても忘れられない1コマになっている。

このやんちゃな研究者と，それ以上の学生たちのために，メディアセンターの方は大変な思いをされているに違いない。この場を借りて，心よりお礼を申し上げます。いつもありがとうございます。これからもよろしくお願いします！